

研究プロジェクト4 「立教中学校関係資料研究」

舟橋 正真

本年度は、計三回の研究会を開催し、戦時期から戦後改革期の「立教中学校教務日誌」（以下、「教務日誌」）の検討を行った。

第一は、連載中の戦時下における「教務日誌」の（史料紹介）に関する検討である。

前年度の一九四二年度～一九四三年度に続いて（『立教学院史研究』第一六号掲載）、今年度は一九四四年度分を同誌に掲載すべく、計三回（第三七～三九回研究会）の検討会を開いた。

具体的には、解題で取り上げる事項の検討に加え、史料中、注釈が必要な用語・人名などを選定していった。各研究員の素案をもとに議論し、五つのテーマに沿って解題を執筆するとともに、注釈も七つ入れることに確定した。執筆は研究員で分担し、全体の編集作業や教員一覧など付録の作成などは、事務局（筆者）が担当した。

原稿案は添付ファイルで送り、回覧した上で、検討会を開き、修正を施して最終稿にまとめあげた。この間、

原稿については立教池袋中学校・高等学校の原真也先生にもご確認いただいた。

以上の成果は、「戦時下の立教中学校『教務日誌』（三）——一九四四（昭和一九）年度——」と題し、本号に掲載された。ぜひご覧いただきたい。

第二は、輪番制による「教務日誌」の読み合わせの継続である。

本年度は、第三七回研究会で、田中智子研究員が一九五一年度「教務日誌」の内容報告を行った。田中氏からは、補足資料を交えながら、立教中学校の人事異動、学友会の状況、ボイスカウトの位置づけ、元校長の帆足秀三郎公職追放解除等に関わる概要が報告された。その上で、これまでの研究会でも注目してきた論点（「立教学院のなかの立教中学校」「立教中学校の旧制から新制への連続性」）をもとに、一九五一年度の「教務日誌」の特色について議論を行った。

なお、次年度開催予定の第四〇回研究会では、「兼任校長制」から「専任校長制」への移行期、および花房正雄校長期の「教務日誌」（一巻～一九五八年一月八日～一九五九年六月三〇日）を検討する予定である。

本年度開催（次年度予定も含む）の研究会は、以下の通りである。

第三七回（五月二四日）

第三八回（七月二六日）

第三九回（一〇月一二日*台風一九号接近のため休会

↓一〇月三二日）

第四〇回（二〇二〇年度開催予定）

そのほか、立教池袋中学校・高等学校史料室所蔵の旧制資料の再検討を継続的に進めている。具体的には、『報告書類 昭和十七年度』『報告書類（昭和十）八年度』『報告書類 昭和十九年度』などの細目データの修正を完了させた。また立教学院一五〇年史（第一巻）の担当部分（立教中学校に関わる原稿）についても執筆を進めている。

次年度以降も、本プロジェクト研究を精力的に進めていくことができると考える。